危機に直面する人新世（２０２５・３・３）

「人新世（アントロポセン）」という言葉は日本では二〇二〇年に発刊され、五〇万部以上の発行部数となって話題になった斎藤幸平の著書の題名『人新世の「資本論」』で社会に周知されるようになったが、世界ではノーベル化学賞受賞者のＰ・クルッツェンが二〇〇〇年にメキシコで開催された国際会議で新規の地質年代の名称として提言したのが初出である。

四六億年の地球の歴史は火山の噴火や隕石の衝突など巨大な自然現象の発生によって区切られ、ヨーロッパの氷床が消滅した一万年前以後は「完新世」と名付けられてきた。しかしクルッツェンは一九五〇年を境界に、森林減少、洪水発生など人為による様々な環境変化が急増しており、それを明確にする「人新世」を提言した。

この見解の背景には二種の根拠が存在する。第一は「グレート・アクセラレーション（巨大な加速）」で、人口の爆発、移動の急増、経済の発展、淡水の不足など人間の経済活動の急速な増加と、その影響による地表温度の上昇、森林面積の減少、生物絶滅の増加など地球環境を変化させる要因の急速な増加などである。

第二は「プラネタリー・バウンダリー（地球の限界）」で、第一の要因がもたらす地球規模の気候変動、海洋の酸性濃度の上昇、生物多様性の減少などが発生し、地球が自動で環境を回復させる能力の限界を突破しつつあるという課題である。実際、気候変動や生物多様性の減少は回復可能な限界を突破したという意見もある。

人間の感覚器官は百年とか千年という単位の緩慢な変化を認識することが得意ではなく実感できないが、一部には明確な変化の現象もある。カザフスタンとウズベキスタンの国境にあるアラル海は世界四位の面積の湖沼であったが、農業用水への大量利用により、最近の湖水面積は当初の〇・〇〇二％しか残存していない。

アフリカ大陸の中央にあるチャド湖の湖水面積は世界一四位であったが、周辺の住民が農業用水として利用し、現在では一〇％程度に縮小、今世紀中に消滅すると予測されている。このような急激な変化は衛星写真を比較すれば納得できるが、地球全体の平均気温が過去一〇〇年で〇・八度上昇したという緩慢な変化は実感できない。

しかし人間は時間を圧縮して表現する技術を手中にしており、一例として過去二〇〇〇年間の地球の平均気温と、七五年後の気温を比較すると、異常な事態が実感できる。過去二〇〇〇年間は多少の気温の上下はあったにしても〇・五度程度の変動であるが、今後の七五年間は最悪の場合、五度程度は上昇すると予測されている。

気温の上昇は我慢できるとしても、海面上昇という国難が襲来しはじめた地域もある。ベネチアの名所のサン・マルコ広場は大潮の時期には冠水するようになり、巨大な堤防を構築して防止しているし、キリバスやツバルのような標高が数メートルしかない太平洋上の島国は国土全体が冠水する消滅の危機に直面している。

ノアの箱船の物語は地球規模の洪水が発生したことを伝承する内容であるが、イギリスの人類学者Ｊ・フレイザーの『洪水伝説』によると、世界の大半の民族に洪水物語は伝承されており、実際に発生した現象と推定される。「人新世」という名前は人類が新規の時代に移行する意味であるが、それが楽園であるという保証はない。真剣な検討が必要である。